表達複雜的感覺的會話實踐課程
—以「被男/女朋友甩了」的感覺為例—

陳姿菁
開南大學 應用日語系/數位應用華語文學系助理教授

摘要

在日語會話教育的初期階段，多是先累積語彙和句型的練習然後逐步進展至「模式」練習。但是當學習者進入中級或是高級階段，想要表達比較精確的複雜感覺時，以固定句式為主的「會話模式」將不敷使用。若要讓會話自由地發展，首要掌握自己的感覺。本研究要報告以「被男／女朋友甩了」為題，如何利用 TAE 手法來導引出初中級程度的學習者的「複雜的感覺」，在語彙受限的情形下如何表達「複雜的感覺」。TAE(Thinking at the Edge)是哲學家・臨床心理學家尤金・簡德林博士所開發的方法。TAE 的中心概念是將注意力放在自己的身體感覺，然後逐步語言化。筆者將此概念帶入中級日語會話的課程中，觀察學習者如何在有限的語彙下找到自己複雜的感覺並將其日語化。

結果顯示，比較實施 TAE 前後的內容，實施後產出較多根據自身感覺的具體內容。此外，也顯示了 TAE 應用於中級日語會話課程的可行性。

關鍵詞：會話　中級　TAE　深感　感覺的表達

Application of Conversation Classes in Verbalizing Complex Feelings: A Case Study of "When He / She Dumped Me"

Chen, Tzu-ching
Assistant Professor, Kainan University, Taiwan

Abstract

In the beginning stage of Japanese language learning, students primarily practice vocabulary and sentence patterns on a cumulative basis before learning progresses to a "conversation model." However, as learning progresses to an intermediate or advanced level, the more learners want to express their complex feelings, the more they will feel the limitations of a "conversation model". To be able to expand and engage in conversation freely, it is important to have a grasp of one's feelings first. This study reports the result of applying TAE theory to conversation class and explores how to draw out complex feelings from learners and how to use limited vocabularies to express the feeling of "when he/she dumped me".

TAE theory was developed by philosopher and psychologist Dr. Eugene T. Gendlin. TAE theory is based on focusing on one's bodily sense and then verbalizing it. This study introduces the concept of TAE to an intermediate Japanese conversation class and observes how learners grasp their complex feelings and learn to verbalize them into Japanese while possessing only a limited Japanese vocabulary

By comparing the situation before and after applying TAE theory, the conversations which TAE theory enables in accordance with bodily feeling were observed. The results of this study suggest that applying TAE theory at the intermediate level of Japanese conversation class is both possible and effective.

Key words: conversation, intermediate, TAE, felt-sense, feeling expression

複雑な気持ちを言語化する会話授業の実践
―「恋人に振られた」気持ちを例に―

陳姿菁
開南大学応用日本語・デジタル応用中国語学科助理教授

要旨

日本語の会話教育の初級段階では、語彙や文型の積み上げ練習が中心に行われ、次第に「型」をモデルにしたパターン練習に進んでいく。しかし、中級や上級に進むにつれ、より的確に複雑な気持ちを表そうとすると、定型文など「型」を基にした会話では限界を感じる。会話を自由に展開できるようになるには、まず自分の気持ちを把握することが肝心である。本研究は、初中級レベル学習者の「複雑な気持ち」を引き出し、限られた語彙でどのように「複雑な気持ち」を表現できるのか、「恋人に振られた」時の気持ちをテーマにしてTAE理論を組み入れた会話授業を実施し、その結果を報告するものである。

TAE（Thinking at the Edge）理論とは哲学者・臨床心理学者であるユージン・ジェンドリ博士が開発した理論である。TAEの中心概念は自分の身体感覚に注意を向けることから始まり、その身体感覚を言語化していくことにある。この概念を中級日本語会話授業に導入し、学習者が限られた語彙の中で自分の複雑な気持ちをどのように見つけ出し、それを日本語に化していくかを観察した。

結果として、TAE理論の導入の前後の比較から、導入した後はより自分の身体の感覚に従った具体的な内容が産出されることが観察された。中級日本語会話の授業においてTAE理論の導入の可能性が示された。

キーワード：会話　中級　TAE　フェルトセンス　気持ちの表現

複雑な気持ちを言語化する会話授業の実践
―「恋人に振られた」気持ちを例に―

陳姿菁
開南大学応用日本語学科・デジタル応用中国語学科助理教授

１．はじめに

日本語を専攻とする大学２年次ぐらいの程度で日本語でどれぐらい自分の感じを表現できるのだろうか。ドリル練習等の機械的な訓練の影響もあり、学習者の受け答えの多くは決まり文句で占められる傾向が強く、意見や感動、驚きや共鳴などのような物事を深く考えたり、感じたりする発話はあまり見かけられない。学習者に意見を求めると、語彙が足りない、文法が分からない、誤りが心配などの声が大多数を占めるが、いくら勉強しても既知語彙を活かすことがなかなか難しいのが現状ではなかろうか。語学教師ならば、どのように学習者のことばの運用能力を引き出すのか、日々考えるであろう。本研究では中級日本語会話の学習者（大学２年次）を対象に実施した、既知語彙を生かして複雑な身体の感じを表現する教育実践の結果について報告したい。

２．先行研究

身体感覚は複雑なのか。

例えば、「悲しい」の一言を思い出してみるといい。今、自分が想像している「悲しい」情景とはどんなものだろうか。大切な思い出のものをなくした時の悲しさなのか、試験に合格しなかったときの悲しさなのか、それとも天災で破壊された故郷の悲惨な状況を目の当たりにしたときの悲しさなのか、悲しさという一つのテーマをめぐって、人それぞれの思いがあるに違いない。

ここで、自分の身体の感じによく注意を傾け、さらに深く感じてみよう。自分の思い当たる情景は「悲しい」の一言で表現しきれるものであろうか。自分の身体は「悲しい」という情緒の中に、それ

以上に複雑な「何か」を感じていないだろうか。人間の身体は自分の置かれる状況の全体を知っている。

人間の身体は複雑であり、「知」的存在であると主張しているアメリカ在住の哲学者及び臨床心理学者のユージン・ジェンドリン博士は身体と言語の関係を次のように語っている。

> 私の哲学では、「からだ」に源をもつ言語を新しいやり方で利用する。それによって、多くのこと特に「からだ」と言語について、「からだ」から直に語ることができるからだ。
>
> 言語がどのように人間の「からだ」に深く根ざしているかは、一般には理解されていない。言語は言葉だけから成り立っているのではない。自分たちがいる状況、「からだ」、言語が一緒になってひとつのシステムを形作っているのだ。言語は人間の生のプロセスに暗黙のうちに存在している。我々が語る必要のある言葉は、「からだ」から直にやってくる。私は自分が今言わんとしていることを「からだ」で感じている。それを見失うと語ることができない。言いたいことの感じを掴んでいれば、ただ口を開けて出てくる言葉に任せればよいだけだ。言語は、我々が相互に作用しあう状況で「からだ」として存在しているそのあり方に、深く根ざしている。(TAE 序文)

ジェンドリン博士は、先生であるカール・ロジャーズ博士と実際のカウンセリングの成功例と失敗例の原因を考察した結果、より自分の感情をリアルに感じていて、その感じている何かを言語で表現できる人のほうがカウンセリングの成功につながりやすいことをつきとめた。それをきっかけにして、ジェンドリン博士は人間の身体はわれわれが意識しているより「知っている」と気づいき、人間の身体の「感じ」に注意を向け、何か感じているけれどうまく表現できない感覚を表現できるようにフォーカシングという心理手法を開発した。

ジェンドリン博士は「身体は潜在意識」であると主張している。彼の主張は、人類の経験が脳の構造と化学物質の錯覚によるとする「客観主義者」の観点や、人類の経験は多様な文化、歴史、言語の産物の一つであるとする「相対主義者」の観点とは異なっており、物理学と生物学の間に新しい概念を生み出した。身体は機械ではなく、不思議なことに周りの事物と錯綜して絡み合っているのであり、彼は独特の方法を開発し、人間の身体の複雑さを理解しようとしてきた Gendlin(1981:viii)。ジェンドリン博士はさらに、この心理手法であるフォーカシングを基礎にして、我々自身の情報の処理領域に起きた変化を一歩ずつ引き出してくれる「辺縁思考 TAE(Thinking At the Edge)」という手法を夫人のメアリー・ヘンドリクス博士と共同で開発した。

「からだ」が感じているまだ言葉にならない「ぼんやりとしている」複雑な内的感覚をフォーカシングで「フェルトセンス(felt sense)」という。TAE はその既製の言葉では語りえない、もしくは「何か」感じているがうまく表現できないことを表現可能にする手法である。TAE には 14 のステップがあり、「ぼんやりとしている」感覚を掴むことから始まり、最終的には理論構築まで可能にする手法である。

TAE を日本語教育に応用した例はまだ多くはなく、当初は作文教育や読解教育から導入が始まった（陳 2010a、2010b；佐藤 2010；宇津木 2010；陳 2011a)。その後、上級会話授業の実践（陳 2011b)、文化教育における異文化理解の教育実践（許 2011）や質的分析の手法（鈴木・得丸 2008；得丸 2011；羅 2011；跡部 2011）などに広く応用されるようになっていった。

作文教育において、辞書的な語義を越える多様な表現の使用が可能であったり（宇津木 2010)、感覚を言語化する方法が得られる（佐藤 2010）と指摘されている。また、新聞記事の感想文を書く実践及びその授業のフィードバックの考察からは、学習者が身体の内側にある概念と向き合って行う言語処理と言語学習の観点において応用

する価値があると評価されている（陳 2010a、陳 2010b)。また、読解授業での応用においては、抽象思考能力の育成が試みられており（陳 2011a)、「高級日語会話」における表現力の向上の試みとして取り入れられた（陳 2011b)。陳（2010a、2010b）でも指摘されているように、学生の内面性を重視する観点において TAE は書いたり読んだりするだけではなく、4 技能のいずれに対しても応用が可能であると考えられる。

しかしながら、目標言語で複雑な気持ちを表現する為には、ある程度の語学能力が必要である。今回は、日本語を専攻とする大学 2 年次の学生の授業に TAE を導入し、限られた語彙でどこまで複雑な気持ちを表すことが可能であるか調査したい。

TAE には 3 つのパート計 14 のステップが含まれる。

パート 1 :「フェルトセンス」を掴む（ステップ 1－5)
パート 2 : 抽象思考に進む（ステップ 6－9)
パート 3 : 理論を構築する（ステップ 10－14)

そこで、本研究ではこの TAE のステップ 1－5 を使い、「ぼんやりとしている」感覚を短い文で表現してみるステップを授業に導入し、中級日本語会話の学習者に自分の注意を身体の感覚に向けさせ、うまく日本語で表現できないと思っている「何か」を既知の日本語語彙で表現することを試みる。

３．実践授業の概要

3.1　学習者および進度

科目 : 中級日本会話上（上級日本語会話・前期必修科目）
学習者 : 台湾の応用日本語学科 2 年生 33 名
時間帯 : 週 4 時間・一学期計 18 週
授業進度 :『学ぼう日本語初級 2』第 21 課から第 30 課

3.2 シラバス

授業の計画は以下のとおりである。担当している科目に関して、学科全体が定めた教科書及び進度があるので、その進度を妨げないように、教科内容と関連付けて、TAE 導入の有無によって学習者の表現の変化を観察した。

表 1 「中級日語会話上」シラバス

週	授業内容	TAE の実施
第 1 週	オリエンテーション	
第 2 週	前期の復習	
第 3 週	L21　明日の朝早くでかけるので、今から準備します。	
第 4 週	L22　船が見えますか。	
第 5 週	L23　卒業したら、日本の会社に勤めるつもりですか。	
第 6 週	L24　あの人は、人間ではないようです。	
第 7 週	L25　早く行け！	
第 8 週	復習 L21-L25	
第 9 週	中間テスト	
第 10 週	L26　学校へ行ってきます。	
第 11 週	L27　このズボンをはいてみてください。	
第 12 週	L28　あなたが行くなら、私も行きます。	
第 13 週	L29　そのケーキ、おいしそうですね。	
第 14 週	L30　犬に手をかまれました。	(TAE 無)
第 15 週	L30　犬に手をかまれました。	(TAE 有)
第 16 週	復習 L25-L30	
第 17 週	復習 L25-L30	
第 18 週	期末考	

学科で定められた教材の中に受身を学ぶ L30 の練習問題「恋人に振られたとき」という設問がある。学習者にとって実際経験したこ

とがなくても、ドラマや小説、友達の経験などから馴染みやすい話題だと思われる。また、大学生の年頃においては関心を引く話題の一つだと考え、実践のテーマとした。

４．授業の構成及び実践内容

TAE の理論を会話授業に導入することで、学習者の会話にどのような変化をもたらすのかを見るために、同じテーマを TAE の導入なしと導入ありの 2 回の授業に分け、それぞれ学習者の会話を採集した。14 週目は導入なし、15 週目はウオーミングアップ及び得丸（2008）がデザインした TAE のワークシート（シート 5）を使用した。

しかし、同じものを 2 回やれば上達するという懸念があるため、同じテーマによる会話のテストの採点を工夫した。学期の成績は学習者の学習動機に大きく作用する要因として考えられるため、TAE 導入なしの会話テストは学期の成績に影響の大きい中間テストで実施し、TAE 導入ありのテストは学期の成績にあまり影響の無い小テストで実施した。

また、豊かな表現を産出する体験を促すため、今回は学習者がステップを踏んで TAE のワークシート（例 2）の記入ができれば、いい評価を与えるようにしている。その後の会話小テストは通常の会話の小テストと同じ基準で評価を与えている。

4.1　TAE 導入なし

まず、TAE 導入なしの場合、以下のようなシートを配り、記入してもらった。先生に質問されたときに、そのシートを元に発表するように指示した。以下は学習者 E の例である。

例 1　シート： TAE の導入なし（学習者 E）

恋人に振られたとき	
どのように感じますか	まず、地球が破滅するほど驚きます。その後は多分泣きたり恋人に理由を聞きたりします。そして、悲しみの海に沈んで行きます。
どうしたらいいですか	空っぽの心を持って生きて行く。

（添削なし）

教材の中では「恋人に振られたとき」にどうしたらいいか、学習者が自由に話し合う活動がある。ここでは同じ課題に対して恋人に振られたとき「どのように感じますか」及び「どうしたらいいですか」の 2 つの質問を設け、学習者に自由に表現してもらった。本研究が対象としている学習者はまだ日本語で十分に話せないため、まずシートの記入をしてもらい、その後適宜教師から質問して、記入シートを元に自分の書いた内容を発表してもらった。

4.2　TAE のウオーミングアップ

上記のテーマで TAE 導入なしの状態で一回実施した。その後、TAE を導入し、再度実施した。

自分の身体に注意を向けさせ、「ぼんやりと感じている」部分を言語化していくことはあまり馴染みのない教育活動であるため、TAE を導入する前に、まずウオーミングアップを行った。

TAE の中心概念の一つとしてあげられるのは「フェルトセンス」である。この「フェルトセンス」つまり「身体感覚」とは何かについて学習者に体験してもらう必要があるため、その「体が知っている」感覚の体験例として以下のものを用意した。

（１）　臭豆腐を思う（もしくは食べる）時の感覚
（２）　フェルトセンス感度チェック（得丸 2008）

（３）　比喩のワーク（得丸 2008）

まず、台湾人にとって非常に庶民的な食べ物で、かつ強烈なにおいをもつ（１）の「臭豆腐」を例として、そのにおいや味を思い出してもらうことを最初に導入した。「臭豆腐」を選んだ理由は食べ物としての「個性」が強いという点と、台湾人なら誰でも口にしたことがあるもので、その感覚としてつかみやすいと考えたからである。

次の（２）では「フェルトセンス」の感度チェックを行った。時間の関係で、得丸（2008）の「フェルトセンス感度チェックのワーク」の 10 問の質問のうち、2 問を取り上げ、質問した。その 2 問は以下のような質問である。

（１）人と出会ったとき、その人の名前を知っていることはわかっているのに、名前が出てこなかったことがある。
（２）言おうとして忘れていたことが何だったかを思い出し、すっきりしたと感じたことがある。

学習者が「うん、うん、ある、ある」という反応を見ながら、「フェルトセンス」は「自分のなかにあるとわかっているのに、うまく表現できない感じ（得丸 2008：14)」と説明した。

さらに、その感覚の延長線で、（３）得丸(2008)の比喩のワーク[1]を使い、人物を喩えるグループ活動を行った。グループ活動の後、何人かの学習者に自分の喩えを発表してもらい、クラスの他の学習者にそれを当ててもらうようにした。

また、「フェルトセンス」は TAE を導入する際の核心的な概念であり、学習者に充分理解してもらう必要があるので、上記の活動は

[1] 比喩のワークとは 6 人の人物のイラストを見て、何に喩えるのかというワークである。得丸(2008)ではそのイラストを見ながら、6 人から一人を選び出し、①食べ物　②乗り物　③台所用品　④そのほか、の 4 つのものを喩えるワークをデザインした。

すべて中国語で行った。

4.3　TAE を導入した授業活動

ウォーミングアップの活動が終わった後に TAE シートを使い、中間テストと同じテーマについて自分の経験に対する「感じ」を言語化する作業を試みた。

使用したシートは得丸（2008）でデザインした「マイセンテンス（キャッチコピー・シート 5)」である。「シート 5」は TAE のステップ 1～5 を応用したものである。例 2 は学習者 E の作成例である。

例 2　シート：TAE の導入あり（学習者 E）

<table>
<tr><td colspan="3">①テーマ　＊テーマを 1 つ選び，「この感じ」としてもつ。
恋人に振られたとき</td></tr>
<tr><td colspan="3">②浮かんでくる言葉　＊「この感じ」のフェルトセンスに浸りながら書く
驚き、悲しみ、闇、溶岩、零れ落ちる、痛み、壊れた人形、止まる時計
＊大事な言葉に下線を引く</td></tr>
<tr><td colspan="3">③仮マイセンテンス　＊フェルトセンスを短い 1 つの文にする。語も文型も自由につくる
闇に囲まれる感じ
＊最も大事な言葉に二重線を引く</td></tr>
<tr><td colspan="3">④空所のある文　＊仮マイセンテンスの二重線の部分を空所にした文を書く
（　　）に囲まれる感じ
＊空所に入る言葉をフェルトセンスから呼び出す</td></tr>
<tr><td colspan="3">キーワードの通常の意味と，フェルトセンスの意味を書く</td></tr>
<tr><td>⑤キーワード 1
闇</td><td>⑦キーワード 2
溶岩</td><td>⑨キーワード 3
壊れた人形</td></tr>
<tr><td>⑥通常の意味
（各自で辞書の意味を調べる）</td><td>⑧通常の意味
（各自で辞書の意味を調べる）</td><td>⑩通常の意味
（各自で辞書の意味を調べる）</td></tr>
<tr><td>⑪フェルトセンスの意味
何も聞こえなくて、
何も見えなくて、</td><td>⑫フェルトセンスの意味
隠された感情</td><td>⑬フェルトセンスの意味
形も心も失った存在</td></tr>
</table>

何も感じられない。		
＊大事な言葉に波線を引く		
⑭拡張文を書く　＊空欄に，すべてのキーワードと波線の語を並べた文を書く 「闇、何も感じられない、形も心も失ったこと」を感じる		
⑮マイセンテンス　＊フェルトセンスを短い1つの文にする。語も文型も自由につくる 何も止まる世界に落ちる		
⑯マイセンテンスの補足説明　＊ほかの人にもわかりやすくする 心を失うなら、何も感じられなくなる。何も感じられないなら、まるで自分の精神的な時計が動かなくなる。目の前の世界もとまっていしまう。		

（添削なし）

このシートにはTAEのステップ1から5までが含まれている。やり方としては以下の通りである。

表2　TAEステップ1—5のやり方（得丸2008参考）

パート1	ステップ1	全体を漠然とつかむ
	ステップ2	うまく表現できない（複雑な）中核に注意を向ける
	ステップ3	キーワードを選び、その（一般的でない）独自の意味をさぐる
	ステップ4	キーワードを選び、その（一般的でない）独自の意味を書く
	ステップ5	ここまでの作業をまとめる＝長めの句または一文で表現する（中核をつかむ）

得丸（2008)では上記のステップを元に例2のシートをデザインした。各欄の記入方法は下記の通りである。

①に活動のテーマを記入する。

②では与えられているテーマの情景に浸りながら、身体の感じ、いわばフェルトセンスを感じ、浮かんでくる言葉を何でも構わ

ないので、できるかぎり記入する。
③では全体のフェルトセンスを感じながら、一つセンテンスを作り、キーワードを選び出す。
④では前項の③のキーワードを空欄にする。選んだキーワードの辞書の意味を確認し、その辞書に収まりきらない自分のフェルトセンスが感じている微妙なところを⑪「フェルトセンスの独自の意味」に書き記す。
⑤ー⑬はキーワードの選定から「フェルトセンスの独自の意味」まで計 3 回繰り返し、⑤から⑬の欄を埋めていく。
⑭では、自分のフェルトセンスを注意深く感じながら、④の文を使い、重要だと思う部分を空欄に羅列し、⑭「拡張文」を作る。
⑮では今までの作業を通して、自分のフェルトセンスとよく照らし合わせ、⑭の文を修正し、⑮の「マイセンテンス」を作る。奇妙な文を作り出すかもしれないが、それはそれでいい。ジェンドリンによれば何か新しいことを言おうとするならば、通常の公的な意味で使う限り、それは正しく語れないからである[2]。そのため、新鮮な文の方がよいのである。
⑯では⑮の文では他人にとっては理解しがたい文かもしれないので、他人でも分かるように補足説明を⑯に記す。

５．考察

以下、TAE シートの手順を踏襲し、最後のマイセンテンスまで作り上げ、補足説明をした学習者の例と TAE 導入なしの結果を比較しながら見ていく。なお、以下提示した学習者の産出に教師の添削は入っていない。

[2] http://www.focusing.org/tae_steps.html

学習者 A		
TAE 導入無		とっても悲しくなったり、自殺したくなるかもしれない
TAE 導入有	拡張文	一種の甘酸っぱくて寒いようで体がしびれるようだ
	MS	甘酸っぱいようで寒いような日
	補足	ある日突然大雨が降ったように冷たくて、雷が体に当たってしびれてしまうようで味が甘くて酸っぱい日

MS：マイセンテンス　　補足：マイセンテンスの補足説明

学習者 B		
TAE 導入無		悲しいから、泣きます
TAE 導入有	拡張文	痛みを感じる（苦しい）今までの記憶が色あせていく
	MS	針に手を刺された痛みを感じる
	補足	痛くて、苦しくて、切ない感じ

学習者 C		
TAE 導入無		最悪だ、何がしたいけど何もできません。自分で怒る。
TAE 導入有	拡張文	それは（慌てる、蝕む、虚しい）感じです
	MS	冷たくて暗い海の底に続いて沈んでしまう
	補足	闇に迷っている、どうすればいいか。像逃卻被海水壓力拉入深處。只能不停下沉。*逃げようとしているが、海の圧力で深いところまで引きずろうされそうになっている。ただただ沈んでいくだけだ。*(イタリックは筆者による日本語訳)

学習者 D		
TAE 導入無		くやしくて悲しくてちょっと怒ります
TAE 導入有	拡張文	雨に降られて、（濡れる、除れない）感じ
	MS	服に濡れられて、引き付いて、方向はないし、目標の所も知らないの。
	補足	振られた。この感じは「濡れられた服を引き付いて、除かれない。全部の力を使って走って、でも目的はない」を似てると思います。

学習者 E		
TAE 導入無		まず、地球が破滅するほど驚きます。その後は多分泣きたり恋人に理由を聞きたりします。そして、悲しみの海に沈んで行きます。
TAE 導入有	拡張文	「闇、何も感じられない、形も心も失ったこと」を感じる
	MS	何も止まる世界に落ちる
	補足	心を失うなら、何も感じられなくなる。何も感じられないなら、まるで自分の精神的な時計が動かなくなる。目の前の世界もとまっていしまう。

上記の例から「恋人に振られたとき」の感じについて学習者が産出した表現の量及び質の 2 つに変化が見られた。

量に関しては、TAE 導入なしの教室活動では、字数を制限していない。例 1 のように「どのように感じますか」を中心に引き出したいため、数行のスペースを用意しておいたが、「悲しいです」「悲しい気持ちです」「とても悲しくなりました」など短い一文で終わ

ってしまうものが多数を占めた。TAE を導入したあとでは、短い一文の内容から数行に渡る長い文の産出が見られた。

さらに、質に焦点をあてると、以下のような 2 点があげられる。

（１）決まり文句から周知の事物と関連付けるようになった

導入前において最も多く見かける表現は「悲しい」「何も～ない」という決まり文句である。TAE を導入することによって、その通り一遍の言い方は、味からの比喩（学習者 A）、身体の痛み（学習者 B）、雷に打たれるや雨に濡れられるなど気候による例え（学習者 A、学習者 D）、海や闇という自然からの発想など、様々な事象を借りて自分の感覚を表す表現が産出された。

（２）行為から心理状態へ

学習者 E の場合、TAE 導入なしでもたくさんの表現で感覚を描写しているが、内容を見てみると、TAE 導入なしでは外界に対する自分の行為（地球が破滅するほど驚きます、恋人に理由を聞きたりします）等の表現が多く見られ、TAE 導入ありでは、自分の内側の心理状態に注意を向けた表現が多く見られるようになった。

上記の実例を通して分かるように、学習者らは少々文法が間違っていても、限られた語彙で自分が「何か感じている」ことを豊かに表現した。

TAE はなぜこのようなことを可能にするのか。

ジェンドリンは次のように語っている[3]。

> 「我々はみな、古典的な西洋のユニットも出る（構成単位に基づく思考様式）を吹き込まれており、他の考え方をすることはほとんど不可能だ。」しかし、生きている「からだ」に注意を向き、「ありきたりの言葉や言い回しを使うのをやめる時、『からだ』の感覚からとても新鮮で色彩豊かな新しい言い回しが生まれる。（中略）「からだ」の感覚から一つのとっかかり（strand）

[3] http://www.focusing.org/jp/tae-intro_jp.html

が浮かび上がり、次から次へとそれが連なっていく。語られる必要のあるものが広がっていくのだ。」

TEA はこうした身体が感じている微妙かつ複雑なものに注意を向けさせ、徐々に言語化していくものである。例えば、前掲例のように「悲しい」の一言で言い尽くせない複雑な感じは、厳密に言えばもちろん「悲しい」の一言では表現しきれない。例 2 のシートの⑥ー⑬の欄はその既製の公用語からはみ出した自分が「何か感じている」部分を気付かせてくれる。ジェンドリン博士によれば「新しい洞察は、古い概念や言い回しでは語ることはできない(TAE 序文)」。自分の出した語が自分の語ろうとしているものとぴったりではないことはとても重要である。その気付きによって、新しいものが生まれ、表現が豊かになっていくのである。シートのガイドに従えば、学習者も自分の「何か感じている」を元に、次から次へと表現を生み出しているのである。

本研究が対象にしている学習者は優良校の学生ではない。むしろ、世間からはあまり勉強ができないと思われている学生である。しかしながら、その個性豊かな回答を見ていると、我々教師側が、日本語を専攻とする大学 2 年次の学習者のレベルでは、豊かな表現はできないと思っていたことは単なる思い込みであり、その能力を過小評価していることに気付く。豊かな表現力を育むという立派なスローガンがあるにも関わらず、それをなかなか実現できていないのが現状であり、今後の語学教育活動においてもこの点についてさらなる検討が必要であろう。

縫部 (2001) は個性化と人間化を融合した日本語教育のアプローチを提案し、その第一の指導原則を「自分が表現したい意味の源泉としての『感情』に対する気付き」とした。彼によると、適宜な感情技法を使用すれば、学習者の独自の感受性や思考に関する機能を活性化し、彼らのもつ内部世界、例えば感情・関心・動機などの部分を引き出すことができるという。

本研究は TAE を援用して、そのような工夫を試みた。TAE の実践は人間自身に注意を向け、感じている部分をステップを踏みながら掘り起こし、暗記した既習語彙（表層）で具現化した。産出した表現は表層と内層（自分の感じ）をうまく統合した結果であり、生きた言語である。

６．今後の課題

本研究は身体感覚を言語化する TAE を中級日本語会話（日本語を専攻とする大学 2 年次）で実践してみた。結果として学習者が限られた語彙でも豊かな言語表現で自分の話したいことを話していることが観察された。中級日本語会話において TAE の実践は可能である。学習者の内面的な感情を引き出す技法は多々あるが、その中の一つの可能性として TAE が考えられよう。

ただし、ステップの煩雑さ、そして TAE への不慣れで、最後まで活動についてこれなかった学習者も見受けられた。この点に関して、学習者の意見を参考にしながら、TAE の導入の工夫、授業活動のデザインなどさまざまな点においてまだまだ改善する余地が残されている。

付記

本稿は、2011 年 11 月 19 日輔仁大學で開催された「2011 年国際シンポジウム『文化における身体』で口頭発表した内容を大幅に加筆し、訂正をおこなったものである。

参考文献・資料

跡部千絵美（2011）「JFL 台湾人学生の視点から見た理想の日本語教師像―TAE 理論を用いたインタビュー分析」『日語教学実践報告集』，台湾日本語教育学会，pp. 46-58.

宇津木奈美子（2010）「『フェルトセンス』の導入―来日した短期留学生の実践から―」『2010 世界日本語教育大会論文集：予稿集』

許均瑞（2011）「台日社会現象を読み解くための文化教育試案―普遍性と共通性に気づかせるTAEステップの応用―」『淡江日本論叢』24, pp.195-219.
佐藤貴仁（2010）「TAE理論に基づく文章表現指導―身体感覚の言語化―」『2010世界日本語教育大会論文集：予稿集』
鈴木(清水)寿子・得丸さと子智子（2008）「作文添削活動の実践研究における添削者の学び－TAEを用いた内省の分析－」『言語文化と日本語教育』36, 日本言語文化研究会, お茶の水女子大学, pp.11-20.
陳淑娟（2010a）「TAE理論に基づく上級日本語の授業の展開：フェルトセンスで新聞記事からパターンを取り出す実践」『2010世界日本語教育大会論文集：予稿集』
陳淑娟（2010b）「TAE理論に基づく日本語教育の実践の可能性」2010年言語・外国語教育研究シンポジウムースキルとしての外国語・教育,輔仁大学,2010年11月20日,pp.1-12.
陳姿菁（2011a）「TAE理論の日本語読解授業への応用—抽象思考の練習を中心に—」『日本語日本文学』36, 輔仁大学, pp.161-181.
陳姿菁（2011b）「表現力の向上を目指す会話授業の試み—「高級日語会話」を例に」『台湾日本語文学報』30,pp.441-464.
得丸智子(2008)『TAEによる文章表現ワークブック』図書文化社
得丸智子(2010)『ステップ式質的研究法—TAEの理論と応用』海鳴社
得丸智子(2011)「『感性』を扱う質的研究」『感性工学』Vol.10 No.2, pp.99-102.
羅暁勤（2011）「台湾人日本語学習者からみたピア・レスポンスの可能性―TAEステップ式質的手法を用いて」『台湾日本語文学報』30,pp.393-418.
Eugene T. Gendlin(1981) *Focusing*, Bantam books.
http://www.focusing.org/index.html
http://www.focusing.org/jp/tae-intro_jp.html

※2012年2月28日受理　2012年5月5日審査通過

References

Atobe,C. (2011) JFL taiwanjin gakusei no shiten kara mita risou no nihongo kyoushizou- TAE riron wo mochiita intabyuu bunseki. *Nichigo kyougaku jissen hokokusyu*. Association of Japanese Language Education in Taiwan, pp.46-58.

Chen, S. (2010a) TAE riron nimotoduku jyoukyunihongo no jyugyou no tenkai:felt sense de shinbunkiji kara patan wo toridasu jissen. *Proc. Int. Conf. Japanese Language Education, 2010,* Taiwan..

Chen, S. (2010b) TAE nimotoduku nihongokyouiku no jissen no kanousei. *Proc. gengo/gaikokugo kyouiku kenkyu shinpojiumu: sukiru toshiteno gaikokugo/kyouiku*, *Fu-Jen University, 2010,* 1-12. Taiwan.

Chen, T.(2011a) Application of TAE Theory with Regard to Abstract: Thinking in a Japanese Reading Class, *Studies in the Japanese Language and Literature*, 36, Fu Jen Catholic University, pp.161-181.

Chen, T.(2011b) Using TAE to Enhance Development of Linguistic Expression in Japanese Conversation Class : A case study of Advance Japanese Conversation Class. *Journal of Japanese Literature & Language in Taiwan*, 30, 441-464.

Eugene T. Gendlin(1981) *Focusing*, Bantam books.

Hsu, C. (2011) A Draft Plan Culture Education for Understanding Japanese and Taiwanese Societies: An Application of the TAE Steps to Notify Universality and Commonality, *Tamkang Japanese Journal*, 24, pp.195-219.

Lo, H. (2011) The Possibility of Peer Response from View of Japanese Students in Taiwan: Using the TAE Steps. *Journal of Japanese Literature & Language in Taiwan*,30, 393-418.

Sato, T. (2010) TAE riron ni motoduku bunsyou hyougen shidou:shintai kankaku no gengoka. *Proc. Int. Conf. Japanese Language Education, 2010,* Taiwan.

Suzuki-Shimizu, T. & Tokumaru, S. (2008) An Analysis of a Teacher's

Reflection on Correcting Students' Composition: Using Think At The Edge to structuralize implicit knowledge. *Japanese Language Education*, 36, Ochanomizu University, pp.11-20.

Tokumaru, S. (2008) *Writing with TAE*. Tosyobunkasya.

Tokumaru, S. (2010) Qualitative Research with TAE Steps. Kaimeisha, Japan.

Tokumaru, S. (2011) Kansei wo atsukau shitsuteki kenkyu. *Kansei Engineering*. Vol.10 No.2, pp.99-102.

Utsuki, N. (2010) "Felt Sense" no dounyu: rainichishita tankiryugakusei no jissen kara. *Proc. Int. Conf. Japanese Language Education, 2010,* Taiwan.